

一刻も早く原発ゼロを決断すべきだ

原発、並行在来線問題などで竹島県議が知事と論戦

4日午前、久しぶりに県議会連合委員会を傍聴してきました。県議会を傍聴したのは旧吉川高校の醸造科廃止問題の時からです。市川政広、小山芳元、竹島良子の3議員が原発問題や並行在来線問題などで質問を行っていました。

日本共産党の竹島議員の質問は原発、医療、並行在来線問題の3本立てでした。このうち、原発問題にしばって報告します。

大飯原発の再稼働について、竹島議員は「野田首相は再稼働を強行した。『安全神話』の復活そのものであり、強く抗議する」とのべたうえで、福井県知事の再稼働同意に対する知事の所感を問いました。

泉田知事は、再稼働について「今回の再起動にかかる手続きで象徴的なことは、原子力安全委員会の委員長が、安全を確認しないと明言し

ていることだ。万が一事故が起きた時にどうするか、防災計画もできていない。安全性を確認したという前提で手続きが進められたことは誠に遺憾だ」と批判しました。

ところが、これだけ明確に問題点を指摘しながら、知事はそのあとで、「一方で、住民の暮らしに責任を持つ福井県知事が原子力発電所の安全性、生活や経済への影響など、どういう情報に基づいて同意されたか承知していない。知事の判断についてコメントはしない」とのべましたが、これは理解できませんでした。

知事発言「ただゼロを叫べばいいというほど単純ではない」に唖然

原発問題で泉田知事の認識にいつそう疑問を持ったのは、大飯原発再稼働に反対する世論の高まりをどう思うか、また、一刻も早く原発ゼロを決断をすべきではないかと問われた時の答弁でした。

知事は、「世論の高まりは当然だ。また、ウラン核燃料を考えると、脱原発をめざす首長会議で提言されていることは現実問題を見れば何をやるうとしてい



雨の中、消防点検実施

市消防団の市長点検が1日実施されました。あいにくの雨でしたが、団員の皆さんは日頃の練習の成果を発揮していました。写真は小型ポンプ操法の競技です。

上越市議会議場改修工事始まる

上越市議会の議員定数が48名から32名になったことに伴い、不要となった机、椅子の撤去と共に、新たなカーペット、椅子の設置工事が行われています。

これまでの議場については「目が疲れる」などといった声が上がっていました。ただ、議場の壁などは変わらないため、最低限の工事となります。

工事、備品購入など必要経費は約700万円。9月定例会までには完成の予定です。

からない。ウランは化石燃料と同じく有限の資源だ。埋蔵量に限界がある。ウラン235は早晩枯渇する。原子力発電は意図しようがしまいが過渡的なエネルギーであり、持続可能なエネルギー体制に転換していくことは自明なことだ。「核燃料をどうするのか。核廃棄物の扱いも考えずに原発ゼロを叫んでみても事態は解決するか。燃料棒をどこに持っていくのか。廃炉も長い期間かかる。どうやって次の人材育成をしていくのか。すべて総合的に判断したうえで日本の国に行く末を考えていかなければならない。ただゼロを叫べばいいというほど単純ではない」と答弁したのです。

原発は技術的に未完成で、いったん過酷事故が起きたら抑えることができませんし、使用済み核燃料の処理もできません。だからこそ一時も早く原発ゼロをめざすことを決断して、プログラムを決め、原発ゼロへの道を歩むことが求められているのではないのでしょうか。これまでも、私は、「泉田知事は福島事故以来、原発問題では前向きでいい発言をしている」というふうに受け止めていましたが、この日の知事発言を聴いて、がっかりしました。

春よ来い 第二〇回 しわ伸ばし

まいったというよりは驚きました。こう言えば叱られるかも知れませんが、歌舞伎役者が玄関の上がり口にどかっと座っているように見えたのです。私の顔を見ている義母の顔がいつもとまったく違って見えました。

八十八の祝いをやってからひと月ほど経ったある日の夕方のこと、妻と一緒に柏崎の母を訪ねてきました。道路沿いにある真紅のつるバラがあまりにもきれいだっただけ、この花を写真におさめてから玄関の戸を開けると、そこに義母がいました。

この日は青空が広がり、さわやかな一日でした。義母は家のそばの畑に出て草取りなどの仕事を何と四時間近くもしたといいます。「家の中は寒いけど、外に出て、日にあたるとちょうどいいから」と言っていました。外仕事で頑張れたのは体調が良かったからに違いありません。

でも、さすがに疲れたのでしょう。玄関で座っている義母の姿からは、動くエネルギーがまったく失せているように見えました。

約一カ月ぶりの再会。茶の間に入ってから、義母と妻の会話が弾みました。一か月も離れていれば、話のネタは山ほどあります。私はそばで二人の会話をじっと聞いていました。まあ、私がしゃべっても、せいぜい妻の十分の一くらいなものです。二人の会話は八十八の祝いの翌日のことから始まりました。

「ばあちゃんちよつとでも具合が良くなれば、山へ行ったり、畑に行ったりするからね。子どもが休みとって、ばあちゃんが山へ行かないように監視しているの」

「そっか、そっか、それでも、出ようとするとする気があるだけいいんだわね。私なんか出られない。よっぽど仕事師なんだね」

「四〇度からの熱が出たらさ、命にかかわることもあるよ。気をつけてね」

じつは、母は祝いをした翌日から三日ほど寝込みました。地元の吉川診療所で診てもらったところ、三九度も熱があったのです。

義母の方はこの一ヶ月間、母のように寝込むことはなかったようです。ただ、足腰の調子が良くないこともあって、義父がいなくなった頃から、台所に立つことがずいぶん減りました。先だっては、数キロメートル離れたところにある食堂から出前をし

てもらったようです。

「まさか、ひとっだけ持ってきてもらうわけにはいかんからさ」

「ふたつ頼んだの？」

「ふたつ頼んだの。それをずっと食べている」

「なに、カツ丼なんか……」

「カツ丼一つと、それから鍋焼きうどん」

「ふーん。まず鍋焼きうどん食べて？」

「それを温めちや食べ、温めちや食べしてる。あれが一番いいわ」

さて、義母の顔のことです。もちろん、これも話題になりました。義母の目の下には膏薬（こうやく）が貼ってあったのです。それも縦横それぞれ五センチくらいの大きなものでした。なぜ貼ったのか、その理由を聞いて大笑いしました。膝に貼っていたら、そのしわが伸びて、つるつるになったから、今度は目じりに貼って、そのしわ伸ばしをやるとういうのです。

美顔をめざす八十八歳の新たな挑戦、うまくいけばいいのですが……。

村上市議会の幹部が上越市を視察 中山間地対策などで意見交換

6月27日の午後、村上市議会の正副議長、委員長などがこられました。昨年、議員提案で制定した中山間地域振興基本条例と上越市議会の議会報告会を学びたいということでした。



このうち、中山間地域振興基本条例に関しては、特別委員会を代表して、私の方から説明させていただきました。スライドで条例の概要などを説明した後、村上市議会のみなさんから出た質問は、「行政側との調整はどうであったか」「今年度の中山間地対策全体の予算額と主な内容はどうか」「直接支払いをどう見ているか」などでした。意見交換もさせていただきました。雪の問題は上越市の方が困難をたくさん抱えています。今冬、多いところは積雪が5メートルを超えたと紹介したら、びっくりした声が上がっていました。意見交換した内容は今後の委員会活動に役立てることができそうです。

視察においでになったメンバーのうち板垣議長さん

は仕事の関係で何度も上越市を訪問されているということでしたが、上越市の山間部について詳しくはたずね。

並行在来線問題で竹島県議が2つの提案

竹島県議は、4日の連合委員会で並行在来線問題を取りあげ、富山県での調査を踏まえた新たな提案をしました。

その一つ、「乗り換えなしで直流・交流区間を運行できる521系電車の乗り入れを直江津駅まで延長すること」。そしてこの電車を「日本海側沿線を走る観光列車」として位置付けて、関係機関と協議すべきではないかという提案です。これに対して坂井交通政策局長は、「並行在来線の運行については、使いやすい運行サービスを構築することが重要だ。会社が利用者のニーズを踏まえて自主的に決めることが基本だ。県としては、通勤通学時間帯を中心に富山県車両の糸魚川駅までの直通運転について富山県と協議を進めている」とのべるにとどまりました。

いまひとつの提案は、譲渡前の総点検と修理についてです。専門機関である鉄道総合研究所に、施設設備の総点検と調査依頼を行い、JRの責任で必要な補修、修理を行うべきだと提案したのです。これについて坂井局長は、「平行在来線会社の方で直接専門職員による実地調査を行っている。その結果を踏まえて、必要な補修修理が確実に行われるようJRに求めていく」とこれまでの主張を繰り返しました。提案はぜひ検討してほしいものです。